

我が人生に悔いなし

三村晃功

はじめに

みなさん、こんにちは。はやいもので、みなさんが本学に入学されてから、二・三週間が経過しました。私も学長に就任したのが本年四月一日ですから、みなさんと同様に、学長一年生というわけです。そういうわけで、本日は第一回めの学長講話となつた次第です。ところで、本学は浄土真宗の親鸞の教えを建学の精神にしていますので、これまでの学長先生は主に宗教、仏教にかかわる講話をなさいました。私自身もその線に沿って本日の講話を試みようかとも考えましたが、私は日本中世文学を専門

にしてこれまで人生を歩んできましたので、必ずしも仏教関係の専門家ではありません。したがって、仏教にかかわるお話は今後の課題とすることにして、本日は私自身が学長に就任するまで、紆余曲折を経て歩んできた人生行路についてお話ししたいと思います。そのほうが、いままさに大学生活の出発点に立っている新入生のみなさんには、参考になるのではないかと、私なりに愚考したからです。

さて、私は昭和十五年生まれで、いま六十二歳です。「我が人生に悔いなし」といふと、みなさんは私にはもうこれから先はないのかと思われるかもしれませんが、もう少ししばらく生きたいと実は思っています。というのは、みなさんがた、女性の平均寿命が八十五歳を越えるという長寿の時代になりましたので、男性である私ももう少しばかり生き延びて、種々様々な人生の喜びを体験したいと考えているからです。そのようなわけで、本日は六十二歳まで生きてきて、さらに今後の人生をおおいに享受しようと思つてのことと考えている研究者の人生を送ってきた一老人が、前途有為な若いみなさんの将来に、老婆心ながら何がしか参考になればと思つて、標題のような大げさな演題を掲げた次第です。

我が人生に悔いなし

お話に入る前に、いくつかお願いしたいことがあります。それは、入学式の学長式辞でも申しましたように、生きているいま、現在を全力投球で生きるという、姿勢と実践を試みてほしいということです。九十分ばかりのおしゃべりですが、なかには周囲の人と私語をしたり、居眠りをする人が必ずいると思います。それは話し手である私の講話の内容がつまらないということに原因があるかもしれません。しかし、いま直面している現在を精一杯頑張るという態度と実践に鋭意努めるとなれば、ぜひ私の話に傾注してほしいと願う次第です。だからといって、極度に緊張する必要は毛頭ありません。自己のペースで、常日ごろ、生活している波長に合わせて、私の話に耳を傾けてくれればありがたいと存じます。

それではこれから、私が今日まで歩んできた我が人生について、いくつかの区切りを設けて、主に教育、研究の視点から要約的にお話したいと思います。

幼年時代

さて、岡山県の北西部に備中高梁市という小さな町がありますが、私はそこから西へ八キロほど行ったところの成羽町で誕生しました。成羽町は私が生まれたところは人口一万五千人ほどの田舎町でしたが、現在は過疎化が進んで、七千人を割ったという話です。そんな田舎町で、私は昭和十五年に四人兄妹の長男として生まれました。父は小学校の教員（後に校長）をしていましたが、母はタバコの販売をしながら、父の薄給を援助していました。岡山県には、河が三本あって、東から吉井川、旭川、高梁川といいますが、私の住んでいた成羽町には高梁川の支流の成羽川が流れていました。一方、この成羽川の反対側には愛宕山、鶴首山があつて、その環境は自然のまっただなかにいる感じで、まるで石坂洋次郎の小説『山と河のある町』を想起させるようなまことに自然環境にめぐまれた境遇でした。みなさんのなかには、田舎より都会のほうが何かと便利で、近代的な感じがするので、ややもすれば田舎を軽蔑する人がある

我が人生に悔いなし

かもしれません。それは各人の嗜好の問題であって、若い時には、一般的に都会生活にあこがれる傾向がありますが、私自身は、山と河があるという自然環境にめぐまれた時空間にどっぷりつかって、夏は魚獲り、秋は木の実やきのこ採りなどをして、一日中自然のなかで過ごしました。この幼年時代を自然のまっただなかで過ごすことができたことは、私の人生にたいへんな影響を与えてくれたように思います。というのは、現在、私は日本中世文学のなかでも、和歌文学研究の仕事に従事していますが、和歌の世界には、素材として自然の動植物がふんだんに登場して、一大パノラマを展開しています。すなわち、和歌研究において、これらの素材を直に見たり、聞いたりした実体験があるのとないのとは、和歌の理解にもすごい差異が生じるわけです。その当時、中世和歌の研究者になるなど、想像だにしませんでしたが、幼年時に自然に親しむという生活をしたという経験は、私にとってかけがえのない貴重な出発点となったことだけは間違いなく、ここに特記しておかねばならない出来事のひとつといえるでしょう。

小学校・中学校時代

小学校に入学したのは、昭和二十二年でした。それから卒業までの六年間は、前述したような自然と直に親しむ生活の連続で、特記するほどのこともない平凡な生活でありましたが、近所の人びととの交流は密接で、夏の夕暮れ時の縁台での大人の人びととの語らいに参加できたことは、いま思うと楽しいひとときでありました。それは現在の近所づきあいの在り方とはかなり様相を異にしていた点で、特筆されるでしょうか。そのような縁台での大人たちの会話から得たのが、どさ回りたちの演ずる芝居見物への開眼でした。というのは、我が家のまん前には、「松浦座」と称する芝居小屋があつて、月に二・三度は、どさ周りの一座が必ずやって来て、種々様々な芝居が演じられていたからです。しかも、向こう三軒両隣りには、無料パスが提供されましたが、家族のなかには見物に出かける者はいませんでしたので、毎回、私がそのどさ回りの芝居見物へ出向くことになったわけです。この小学校時代の芝居見物は、娯楽

我が人生に悔いなし

のそれほどなかった当時にあつては、貴重な楽しみを提供でありましたが、この小学校時代のどき周りの芝居見物の体験は、現在、文学研究に携わっているという私の職業と無関係ではない点で、これまた特筆される体験であつたといえるでしょう。

そうして、私は昭和二十八年に中学校へ入りました。中学校での新しい体験といえば、みなさんも同じ体験をしたと思いますが、小学校のそれと異なつて、担任がすべての教科を教えるのではなくて、各教科の先生がそれぞれ個々に教えてくれたことでした。これはまったく新たな経験で、とても新鮮で興味深く感じられたことを記憶しています。そのようななかで、数学のN先生には泣かされました。というのは、その先生は生徒の学力の程度などおかまいなしに授業を進められるので、理解力に乏しい私などは、理解のために隣りの友人に話しかけたりなどしていると、すぐに指名されて返答できないと、黒板の前に出されゲンコツをくらつたからです。ひどい時には、二十人ぐらいの生徒が黒板の前で、ゲンコをくらわされたことがありましたが、そんなことがあつた翌日には、先生は手に包帯を巻いて出勤していたようです。まさに体罰といえる先生の言動でしょうが、その当時は殴られる側に非が認められれば、みんな

な文句など言わなかった時代です。紳士、淑女面をしている先生の多かったなかになって、しかしN先生は個性的な性格の持ち主で、私には、一面心惹かれる、にくめない存在であったように記憶しています。

中学校時代に経験した苦い思い出はいくつもありますが、そのひとつに、全校一斉競争テストなるものがありました。これは一年生から三年生までを対象にして、教科別に生徒の学力を判定するという一種の学力テストですが、その結果は、優秀者を一番から順次揭示して、全生徒に公開するというものでした。生徒の学力増進を目的にしたこの学校側の一斉テスト実施の趣旨については、私はそれほど反対ではなかったのですが、第一回めの試験の問題用紙を見て、私は怒りがむらむらとこみあげてくるのを押さえることができませんでした。それは問題用紙が営業目的で作成された市販のそれであったからです。教師が営業用の試験問題をそのまま使用して、生徒の学力を判定する手段にするという、教師側の怠慢な態度、実践を許すことができなかつたのです。私はさっそく友人を誘って、隣り町の高梁市に向向き、本屋で同種の問題集を購入して帰り、私と友人は第二回めの競争テストに備えました。案の定、そのテス

我が人生に悔いなし

トには、準備していたのとまったく同じ問題が出ていたではありませんか。私と友人は、前もって正解を知っていたわけですから、満点が採れないほうがおかしいのです。学校側は常日ごろ、あまり成績の良好でない生徒二人が、各教科で満点に近い得点を得たわけですから、これはおかしいと気づいたのでしよう、次回のテストからは市販の問題集を使用するのは中止しました。教育者が安易な態度、怠慢な心で教育実践などとして、実をあげることなどできるわけがない。中学校時代の私は、正義感に燃えながらも、かなり我慢の毎日を送っていたように思われますが、いま客体化してみれば、私の中学校時代は、自我の心が芽生えはじめていた時期と規定することができますように思います。

高等学校時代

私の高校入学は昭和三十一年の四月でした。田舎のことですから、学力のレベルは当然低かったと思います。我が家には不動産などの資産がそれほどなかったうえに、

父親が教員をしていたので、子供に教育をつけてやるのが親の最大の贈り物である、と両親は考えていたようです。それで、できるだけ教育レベルの高い高校への進学をみんな考えていました。当時、岡山県には、五パーセント入学という制度があつて、近隣の偏差値の高い高校への越境入学が許されていました。それは各高校の定員枠の中で、五パーセントの定員に限って入学指定地域以外からも入学生を集めていいという、県の認めた入学制度でした。私は中学時代は遊んでばかりしていたのですが、偏差値の高い隣り町の高梁高校への入学を希望していました。しかし、私の父親は地元優先主義で、「地元住民が地元の高校へ進学しないで、どうするか。高校進学は地元の高校で充分だ」ということで、私は進学先を地元の成羽高校と決めました。そんな次第で、成羽高校へ進学したわけですが、私は本来、負けん気だけは人後に落ちないという根性の持ち主でしたので、高校入学後は一生懸命勉学に励みました。だいたい一日平均七時間ぐらいは勉強していたでしょうか。大学入試のためには、高校の教科書を全部理解できれば、それで充分だと考えましたので、教科書のほとんどすべてを丸暗記しました。それは、演劇俳優が芝居の台本を全部暗記して演技しているのに示

我が人生に悔いなし

唆を得ての試みでしたが、その結果、英語や世界史などの教科では、ほぼ一番の成績をおさめることができたように思います。

ところで、高校時代に特筆できる出来事といえば、すでに平成十六年度版の「大学案内」の「学長からのメッセージ」に記したことです。高校二年生のときに開催された文化祭で、大学教授による講演会があったことです。それは岡山大学の「源氏物語」研究の第一人者・森岡常夫教授による講演会でしたが、そのとき、教授は松尾芭蕉についてお話しになりました。なにせ田舎の町で育ちましたので、私は大学の先生の講演を聴くなど、生まれて初めての経験でした。それは高校の普段の授業の進めかたとは異なつて、芭蕉の人生をたどりながら作品の位置づけなどにも言及した、充実した魅力あふれる講演内容でした。私は将来どんな職業に就こうかなど、それまでは漠然としか考えていませんでしたが、文化祭での森岡教授の講演は、私に「将来大学の先生になればいいなあ」という示唆を与えてくれました。その意味で、高校二年次のときに遭遇した文化祭での講演会は、私にとってたいへん有意義で、貴重な催し物であったと言えるでしょう。

高校時代の思い出として、もうひとつ忘れることのできない出来事があります。それは授業を受ける側の生徒としては、あまり誉められた話ではありませんが、授業を展開する先生への暗黙の批判、非難にかかわるものです。ひとつの事例として紹介すれば、国語の補習授業のときに、担当教員は問題集をテキストにして授業を進めていましたが、解答例を示す際に、必ず指名して、生徒に解答を言わせるのです。その方法にはまったく反対はないのですが、教員は指名した生徒の答えた解答の是非を授業に参加している生徒全員に尋ねて、そのとき一番多くの生徒が賛同した解答例を正解とするのです。ほとんどの解答はそれで正解でしたが、私にはどうしても納得のいかない解答例も見出されましたので、帰宅して『大学入試正解』などで調べてみると、先生が認定した正解が誤答となつている場合も多々ありました。つまり、その先生は授業する際に、予習もしないで臨むという、安易な授業態度・姿勢をとつていたのです。さつそく私は教員室に向向いて、個人的に抗議を行いました。その結果、今回の補習授業からは、先生も予習をして授業に臨むようになって、この件は落着きましたが、私には元来、向こう見ずな一面があつたようです。

我が人生に悔いなし

また、正規の授業の中にも、教員の怠慢から生ずる、いい加減な授業展開しかできない教材もありました。大半の授業内容については、ほぼ満足していましたが、なかには不満な授業の科目もありました。そのような授業のときには、不遜にも、私は過去に出題された入試問題などについて、質問を投げかけ、その授業担当者を困らせるといういじわるを実践しました。いまにして思えば、何も入試問題が解けないからといって、その先生の学問のすべてが量られるはずはないのですが、その当時はそんな手段を講じて、少しでも充実した授業を受けたいという気持ちで、担当者の授業改善の一役を買った次第です。その後、私も高校や大学で教授する立場になりましたが、私の講じる授業、講義内容について、露骨に非難や批判などする受講者にほとんど遭遇することがありませんでしたので、現在の生徒や学生に比べて、昔の生徒たちは案外、真面目であったのでしょうか。とはいえ、私は体育の授業でフオーク・ダンスがあるときには、いつも体調がすぐれないという理由で授業には参加せず、見学をしていましたから、成績票の体育の評価欄には「2」の評価しかもらえませんでしたので、私に正面から人を非難する資格などなかったのは事実でした。

なまいきなお話をいくつかしましたが、総じて、高校時代の私は、受験勉強にはひどく熱心でありましたが、それに関係のない教科は無視するという言動に見られるように、かなり偏った考えをもつて行動する「変人」であつたように思います。しかし、高校時代に徹底的に受験勉強をしたおかげで、いまでも多少英語が話せる能力が備わっていることなどは、その副産物といえるのではないのでしょうか。高校時代に、脇目もふらず、一心不乱に受験勉強に打ちこんだ努力を、私はある面では評価しているくらいで、現在でも、そのことをまったく後悔などはしておりません。

大学時代

私は高校時代、教科では英語が一番得意な教科でしたので、大学は文学部の英文学科に進学して、将来は英文学の研究者になろうと考えていました。それで英語に関係する都市としては異国情緒いっぱい神戸がすぐに想起されましたので、神戸にある大学ということで、神戸大学の文学部へ進学しようと心積りをしていました。しかし、

我が人生に悔いなし

大学進学でも父親の「地元の大学へ進学すればいい」という意見を聞き入れて、結局、私は岡山大学へ進学しました。岡山大学は当時、法学部と文学部を統合した法文学部でしたが、その文学科を進学先に選びました。文学科のなかには十くらいの専攻がありまして、私は願書には、第一志望を英文学、第二志望を国文学、第三志望を仏文学、第四志望を独文学と記入して提出しました。その結果、私には第二志望の合格通知書が送付されてきました。入学後、国語国文学専攻生の祝賀会が開催されましたが、その席上、文学部長の江実教授が私の耳もとで、「君は英文学を専攻していたが、国文学専攻生に男子の志望者が極度に少なかったので、第二志望で国文学を志望していた君を採った」とささやかれました。それはおそらく冗談に私を慰めてくださったので、発言だったのであろうと憶測しますが、しかし、いまよくよく考えてみると、大学受験当時、私の将来やりたかったのは英文学の研究でありましたが、国文学専攻に回されたことは、以後の私の人生にとって、心底よかったと実感しています。なぜなら、真に英文学を極めようと企図したとき、英文学の作品はキリスト教の精神を根底にして制作された文学ですから、仏教の国に生まれ育った私などがその本質を究めるために

は、少なからず無理があるのではと考えたからです。実際、現在、私は日本中世文学研究に携わっていますが、国文学専攻に回されたおかげでほんとうに幸福な毎日をごしています。みなさんのなかにも、第一志望の大学への入学がかなえられなくて、いやいや本学に通学している人がいるかもしれません。しかし、公の場で下された判断に対しては、厳粛に受けとめるといふ謙虚な心を、どうか抱いてほしいと思います。要は、公の場で下された判断を重く受けとめて、自分が現在置かれているその現実を自己の使命だと認識する覚悟が重要であるわけで、その覚悟が決まれば、後は、今後の将来に向かってがむしゃらに突き進んでいくという、開拓者精神をもって行動することが何よりも大切な課題となります。過去の失敗事にくよくよ悩むよりは、現在置かれている現実じかに目を向け、その分野で誠心誠意努力して、将来を展望するという生きかたのほうが、どれほど意味のある生きかたではないでしょうか。私の研究者人生が、好運にも今日まで持続しているのは、第二志望に回されるという事象があったればこそその結果であろうと、いまはその逆縁をむしろ喜んでゐる次第です。

岡山大学法文学部文学科国語国文学専攻に入学したことは、実は、高校の文化祭で

我が人生に悔いなし

拝聴した森岡常夫教授の所属されていた学科専攻生になったことを意味しますので、後年、私は当然、森岡教授に卒論指導を仰ぐことになりました。これも宿縁といった言いすぎなのでしょう。私は奇しくも、高校生のように抱いた夢を実現したわけですが、卒業論文は「『源氏物語』の崇高美」というものでした。これは森岡教授が東北大学で文芸学を樹立された岡崎義恵教授の愛弟子であられた関係で、文芸学の立場で執筆した論文でした。すなわち、「源氏物語」を美の視点で見ると、「あはれ」という美的理念で包括することができます。しかし、「あはれ」の理念が文芸作品のなかで機能するには、それに対立する「崇高」なる美的理念がもう一方にあって、両者が相対的關係にあって初めて、「あはれ」の美的理念も価値をもつてくるという構造になっていきます。したがって、森岡教授は、「あはれ」の美的理念と対立の構図にある「崇高」という美的理念で「源氏物語」の美を探究したらおもしろいのではないかという示唆を与えてくださったわけです。その示唆を得て、「源氏物語」のなかに認められる「崇高」美に該当する種々様々な事象、場面を採りあげて、分析した結果が、さきに掲げた私の卒論であったのです。この卒論は自分から主体的にテーマを設定し

て練り上げたものではなく、他人の示唆を得て完成させた性質の論文でしたので、自慢できるほどの優れた出来映えの卒論にはならなかったように思います。

ところで、岡山大学での思い出には、たいして私に感銘を与えるようなことはありませんでしたが、専任講師であった赤羽学先生にはたいへんお世話になりました。先生は近世文学のなかで芭蕉研究では新進気鋭の研究者でいらつしやいましたが、その研究方法は東北大学の出身者にしては珍しく、文芸学というよりは文献学を重視し、文献学に精通しておられました。私はこの赤羽講師から、研究のために必要ないろいろな基礎学問についての手ほどきを、個人的に受けました。先生は、学問研究に志のある者には、相手が学生であろうがあるまいが、ついわれを忘れて献身的に指導を惜しまない、そんなユニークな先生でしたので、私に対してもじつに親身になって指導してくださいました。のちに、岡山大学の付属図書館で、一時、私は池田家文庫の整理を手伝うことになりましたが、学部時代に赤羽先生から受けたご恩は、一生忘れることはいけません。

ともあれ、森岡教授のもとで卒論を一応、しあげたのちは、私には就職するつもり

我が人生に悔いなし

は毛頭ありませんでしたから、大学院進学の相談に森岡教授の研究室を訪れますと、先生はご自分の母校の東北大学大学院を勧めてくださいました。というのは、当時の岡山大学にはまだ大学院が設置されていませんでしたので、当然、他大学の大学院を受験する以外に方法がなかったからです。しかし、仙台にあるその大学院には、気候も風土も異なる岡山県育ちの私は、それほど乗り気になれず、関西県で適当な大学院はないかとお尋ねすると、森岡教授は、文芸学に近い方法論で研究をしている教授陣が比較的多い大学院ということで、大阪大学大学院を推薦してくださいました。そんなわけで、私は岡山大学での学部生活に別れを告げて、新たな出発として東北大学と大阪大学の両大学院を受験することになりました。もちろん、専攻先は英語英文学専攻ではなくて、国語国文学専攻でした。

大学院時代

当時の国立大学の入試制度には、一期校と二期校のグループがあって、国立大学に

は二度の受験のチャンスが与えられていました。ところで、東北大学も大阪大学もともに一期校に属していましたので、学部受験ではどちらか一方の受験しか許されていませんでした。しかし、大学院受験は学部のそれとは別で、同じ一期校に属する大学でも受験日は異なっていましたので、両大学院とも受験が可能でした。そういうわけで、私は入学試験がはやく実施される大阪大学大学院をまず受験しました。試験の出来は、専門科目はそれほど出来具合ではありませんでしたが、第一外国語の英語と第二外国語の漢文はほぼ満点の出来映えでしたから、合格はまず間違いないかろうと予想していました。にもかかわらず、合格通知書が予定日を過ぎても送付されてきませんでしたので、いらいらしていたところへ、近所の自転車屋さんの奥さんが「こんなものが私の家の土間に落ちていましたよ」といって、葉書を持ってきてくれました。見ると、それは心待ちにしていた阪大からの合格通知書ではありませんか。今日でも郵便物の配達では、郵便局員の不祥事がまったくなくなつたとはいえませんが、このときにはさすがの私も、配達人の不用意な仕事ぶりに腹が立ちました。このような次第で、大阪大学大学院に合格しましたので、森岡教授の推薦してくださった東北大学

我が人生に悔いなし

大学院の受験は中止してしまいました。入試が好きな者などいませんからね。

大学院での生活は、修士課程の一年次は、生活費を親からの仕送りにのみ頼っていたので少々、苦しい思いをしましたが、二年次ときには、校長であった親父が退職した関係で、国から奨学金を貸与してもらえらることになりましたので多少裕福になったおかげで、下宿先の大阪市生野区の鶴橋から、演芸場の立ち並ぶ道頓堀界隈へ出て、週に二・三度は角座などで寄席を見物するという生活に変わって、私は大阪の庶民文化の実態をじかに身体で感じ取ることができました。大阪で暮らすのは初めての経験でしたが、なかなか充実した楽しい二年間でした。

阪大の大学院には、教授に小島吉雄先生、助教授に田中裕先生がおられ、両先生ともに『新古今和歌集』研究の権威でいらつしやいました。このお二人に、私は和歌研究の手ほどきをみっちり仕込んでいただきましたが、修士論文は岡山大学で『源氏物語』を卒論に選んでいた関係で、同じく同作品を対象にして、『源氏物語』における宇治の大君の造型と作者の精神機構』という論文を書きました。この論文の趣旨は、『紫式部日記』を読んでもみると、作者の精神構造が、ある対象を判断する際に、昔の

時計の振り子のように、両極を揺り動くという、いわば二重構造の精神機構になって
 いることに気づき、そのような精神機構をもつ作中人物を『源氏物語』に求めると、
 まさに宇治の八宮の娘の大君がびつたりあてはまるといふ事象を発見して、論証した
 ということに尽きます。具体的にいえば、「出家」といふ行為に対して、紫上、宇治
 の大君、浮舟の三人の作中人物がどのように対処しているかの分析をとおして、「た
 ゆたひ」という二重の精神構造を持っている人物に該当するのは宇治の大君であると
 認定し、作者・紫式部とはほぼ同種の考えかたを持つ、いわば分身的な作中人物は宇治
 の大君であろうと推断した論文です。この修士論文は私自身が主体的に取り組んで仕
 上げたものですから、自分が考えたとおりの出来映えでしたので、評価も「優」をも
 りました。ちなみに、この論文は、私が後年、大阪大学に非常勤講師として出講し
 た際に、国文学共同研究室の本棚の片隅にあるのを見付けましたので、こんな論文が
 学生指導のサンプルにされていたのではたまらないと勝手に判断して、私はその論文
 を持ち帰って、京都光華女子大の私の個人研究室に保管しています。みなさんのなか
 に私の修士論文をご覧になりたいかたがいましたら、どうぞ学長室まで遠慮なくお申

し込みください。

岡山大学付属図書館池田家文庫時代

まあまあのも出来具合の修士論文を執筆することができた私は当然、博士課程に進学し、さらに学術研究を深めたいと目論んでいました。その時には小島教授は退官されてしまったので、主任教授の田中教授に相談したところ、「いいよ」とのご返事をいただきました。私は博士課程に進むことになりました。ところがそんな折、母校の岡山大学の森岡教授から「付属図書館に助手のポストを設けることになったので、帰ってきませんか」という手紙が届きました。私は博士課程でも少し勉強がしたかったので、その旨、返事を書いて森岡教授に了承を得るべく送ったのですが、それに対する先生からの返事は返ってきませんでした。その当時の私は純真無垢な学生でしたから、つきり森岡教授は私の提案に反対なさっているものとはばかり思っていました。いまにして思えば、私の言動のほうがかまことに甘かったのですね。昭和四十年四月、大阪

大学大学院の修士課程を修了した私は、岡山大学の森岡教授のもとを尋ね、「私の研究室はどこですか」と聞くと、先生は「あなたは博士課程に進むと言ってきたから、用意した助手のポストは元の研究室に返しました」と答えられました。これにはさすがの私もびっくり仰天しました。それなら、当然、その旨の返事がくるものとはかり私は思っていたからです。当時の大学教授の威厳ときたら、現在のそれと比べると雲泥の差がありましたから、私は教授の許可なしに自分ひとりで身勝手な行動などするものではないと、真実思っていたのです。それほど当時の私は初心だったのですね。

そういうわけで、断腸の思いでせつかくの博士課程を断念して岡山大学に帰ってきたにもかかわらず、助手のポストに就くことができなかつた私は、自分自身の甘い判断に基づく言動について、しみじみ反省しました。次のステップに進む際には、どこからみても完璧な状況設定をした後でないと行動に移すべきではない、ということ。私は岡山大学への就職に際して身にしみて実感した次第です。この私の失敗例を他山の石として、どうかみなさん、くれぐれも私の二の舞を踏まないように、行動には慎重であってほしいと思います。

我が人生に悔いなし

私にとってこの大学図書館の助手就任への失敗はたいへんな衝撃でしたが、一方で、逆に、いい経験をしたという教訓にもなりました。私は何事をも前向きに考えるという性格の持ち主ですので、「さて今後はどうするか」と考えました。博士課程には私が辞退したあと、次の成績の人がすでに入学していましたので、大学院に戻ることは不可能でした。森岡教授に今後策を相談しますと、「付属図書館にある池田家旧蔵の古典籍類の整理・調査費に、文部省から百万円ほどおっているのです、その調査をする気はありませんか」と提案してくださいました。その結果、私の就職先は付属図書館ということになって、私の進路は池田家文庫蔵の諸文献・図書のを整理を担当するという意外な方向へと進展することになりました。

ところで、池田家文庫というのは、備前岡山藩に旧蔵の典籍類を池田家の当主が岡山大学に寄贈された関係で、その名を冠して「池田家文庫」と命名して付属図書館が管理している特殊文庫でありまして、その典籍類の総数は二万点を越え、その主なるものは写本と版本類でありました。私の仕事は、その二万点あまりの典籍類を整理して解題を執筆するというのがその主要な内容でした。

池田家文庫での仕事は、主として森岡・赤羽両先生の指導のもとに、所蔵の典籍類を一点ずつ、文献書誌学的な視点からみて重要な事項をカードに記入することでした。初めのうちは、私がひとりでカードづくりで専念していましたが、それではどうてい二万点の整理に間に合いません。そこで、岡山大学に勤務する教授陣の奥さんが三人に応援を頼むことになりました。その結果、都合四人で整理を担当することになりましたが、数ある写本・版本に毎日向かって悪戦苦闘するわけですから、私の写本の読解力は飛躍的に進展しました。それはともかく、この仕事を通じて驚いたことは、専業主婦の教官の奥さんがたの写本読解力がまことに優秀で、種々の学問的な教養に裏打ちされた言動でありました。それは私の大学院での研究生活が文献学よりも文芸学に近い作品論に明け暮れしていたことも関係なしとしますが、一緒に仕事に従事した大学の教官婦人がこんなにも学問的実践力をもっておられるのは、彼女たちが学生時代に私などよりもしつかりと勉学に打ち込んでおられた証拠ではないでしょうか。現今、文部科学省では「ゆとり教育」とかいつて、児童の自主性を重んじる教育方針を掲げて実践につとめています。基礎学力、専門的な学力は、初期の段階に徹底的

我が人生に悔いなし

に叩き込む必要があるのではないかと、私はともに仕事に従事した大学の教官の奥さんがたの仕事ぶりから、身をもって体験しました。このときの成果はのちに、『岡山大学蔵 池田家文庫総目録』(昭和四十五年三月刊)としてまとめられました。昭和四十年四月から翌年三月までの一年間は、私にとつて文献書誌学を実地に学ぶという機会が与えられたという意味で、まことに貴重でありがたい一年間でした。その意味では、私の軽率な判断の結果から生じた岡山大学付属図書館池田家文庫への就職は、文献学・書誌学の学力を徹底的に体得させてくれる結果となって実を結び、私の研究者人生への出発の契機ともなったわけです。もしこの時の失敗がなくて、大阪大学大学院で修士課程からそのまま博士課程に進学していたとしたら、私は現在とはまったく違った人生を歩んでいたかも知れません。

ちなみに、私はこの池田家文庫蔵の典籍の整理に従事していたおかげで、『六花抄』なる歌書を新発見するという好運にも恵まれました。これは藤沢の禅僧・由阿編『六花和歌集』から難解な和歌を抄出し、それに注解を付した和歌の注釈書ですが、この写本を精査した私は「岡山大学所蔵『六花抄』について」なる論文を作成して、

京都大学国語国文学研究室編輯の『国語国文』に投稿した結果、同誌の第四百二十号（昭和四十四年八月）に採択されました。この論文を発表したおかげで、中世文学研究の第一人者である島津忠夫氏から声がかかって、『六花和歌集』をはじめ、各地に散在している同書の注釈書である『六花集注』も合わせて出版しようという計画が持ちあがり、私は島津忠夫・井上宗雄・稲田利徳の三氏とともに、古典文庫から三冊の書を刊行することになりました。これまで私は『源氏物語』を研究対象にして研究を進めていましたが、この論文および編著の出版によって、中世和歌の研究者として学界にデビューするという副産物にも恵まれる結果がもたらされたのです。つまり、私は池田家文庫の整理に従事したおかげで、運よく将来の方向性がほぼ決定をみ、その研究対象も主に中世和歌を扱うことになって、これまでの中古の物語研究から中世の和歌研究へと方向転換することになったのです。この方向転換は、単純素朴で磊落な自分自身の性格からみて、原稿用紙二千枚を越える『源氏物語』を研究対象にするよりも、三十一文字しかない和歌の集合体である歌集研究のほうが性分にあっていたように、研究領域も未開拓の分野がかなり多く残されているということも手伝って、研

我が人生に悔いなし

究意欲の旺盛な私にはぴったりの選択でした。その意味で、私はいまでは、博士課程に進学しないで池田家文庫で文献学の仕事に専念できたことを、むしろ感謝しているくらいで、大げさにいえば、このような運命に陥ったことを、神仏のご加護があったからではないかと、逆に喜んでいるといっても過言ではありません。

津山高等学校・高梁高等学校時代

岡山大学の池田家文庫での生活は、研究面で私の将来の方向性を決定づけてくれた点では、まことに有益な一年ではありましたが、生活面ではそれほど魅力あるものではありませんでした。三月になっても助手のポストは復活していませんでしたし、文部省の科学研究費も次年度は付いていませんでしたから、困った私は前文学部長の江実教授に相談した結果、県北の名門校である岡山県立津山高等学校の非常勤講師を勤めることになりました。津山高校は一学年六百人規模の県北では第一のマンモス校で、毎年、東京大学に五人程度が入学するという進学校でした。私はこの高校で一生懸命

授業に専念しましたが、生徒諸君もまた、熱心に私の授業に耳を傾けてくれました。私の授業は大学院で研究していたせいか、ほかの先生がたのそれとは多少趣を異にする授業展開であつたらしく、たとえば教科書を離れて『源氏物語』の本質は何かなどの話をする、生徒は目を輝かせながら私の拙い脱線話を聴いてくれました。私は非常勤講師であつたにもかかわらず、二年生の担任を持たされましたが、この高校での教壇生活はなかなか楽しく、教えるということの重要さも実感しました。

ところで、非常勤講師にはボーナスなどの手当は一切なく、生活は楽ではありませんでした。津山高校の同僚諸氏には好漢が多かつたうえに、教育職にも魅力を感じていましたので、研究職にありつけないままでした。私は、専任の高校教員への道を考えて、岡山県の教員採用試験を受験することにしました。その採用試験の受験科目には、教養・教職科目と専門科目の二種類がありました。とくに教養・教職科目については、教科書と問題集で徹底的に準備しました。大学受験の際に、私は教科書を全部暗記して受験に臨んだと前に申しあげましたが、今度もそのとおり完璧に準備しました。その結果、専門科目の国語の試験問題には、まったく驚かされました。という

我が人生に悔いなし

のは、古文の問題に、私が高二の授業で教えていた『源氏物語』の須磨の巻から出題されていたからです。私は卒論でも『源氏物語』を扱いましたので、古文の問題はほぼ満点、現代文も容易な出題でしたから、専門科目の得点はかなりよかったです。思います。また、教養・教職科目の試験問題も、だいたいの問題集にも収めてあるような標準的な出題でしたから、総じて、採用試験の出来映えはかなりよかったです。ないでしょうか。案の定、合格通知書が送付されましたので、私は、新しい赴任先の相談に校長室に入りますと、校長は開口一番、「そのまま津山高校で勤めてくれないか」と即答してくれました。その藤井太郎校長はスケールの大きい、太っ腹の大人物でしたが、その藤井校長のおかげで、私は生活費の心配なしに、今後は教育に専念しながら研究生生活も続けられるという、恵まれた境遇に入ることになりました。

私の津山高校での教員生活は、昭和四十一年四月から同四十九年三月までの九年に及びますが、この九年間の津山高校での生活は、私にとって種々様々な面で一番貴重な体験ができた、私の人生で特筆するに価する時期といえるでしょう。専任教諭になつた私は昭和四十二年四月、一年生の担任となつて、その後、順次三年まで持ち上がる

というローテーションで進みましたが、その後は、なぜか転勤するまで三年生の担任ばかりを担当させられました。三年生の授業を担当することは、ある意味で苦勞も多く、責任も重いとはいえませんが、反対に、いいこともたくさんありました。それは、三年生の担任の場合、生徒が大学受験のために外に出向くために、一月以降の授業がほとんど課されないという、三年生の担任のみが領有し得る特権です。私は、この授業担当を實質免除される期間を、学界に未紹介の文献の翻刻作業に充当することになりました。その当時、私は類題集および私撰集の研究に専心していましたので、版本でしか伝存していない『明題和歌全集』という類題集の翻刻作業に鋭意、取り組むことにしました。この津山高校時代の翻刻作業はのちに、『明題和歌全集』『明題和歌全集全句索引』（昭和五十二年二月刊）二冊に結実し、福武書店（現ベネッセコーポレーション）から出版、刊行されました。定価は一冊一万四千円でしたので、二冊で二万八千円の高価なものになったために、当時はそれほど売れなくて、出版社に迷惑をかけました。しかし過年、八木書店（東京）の出版目録をめぐっていたところ、この拙編著に八万円の高値が付いているのを発見して、多少の感慨を禁じえませんでした。一方、

我が人生に悔いなし

これで出版社にも一応、面目が保たれたなあとの思いをしみじみかみしました。

津山高校時代に体験した、もうひとつ特筆できる事柄に、同僚との間に「心の交流」ともいべき人間関係を築くことができた貴重な思い出があります。それは土曜日の放課後ごとに同僚間で懇親を深めるために、ソフトボール・チームを編成して楽しんだというものです。そのチームは「ゴジラース」と称していましたが、同僚たちは、老若の区別なしにこのチームに参加して、和気あいあいと練習試合などを楽しみました。私ももちろん、このチームでプレーしましたが、おもしろかったのは、練習試合が終わったあと、みなで連れ立って、「銀チロ」という居酒屋に集合して、懇親を深めたことです。そこでは日ごろ教員室では見ることのできなかつた同僚の、いわば隠されたもう一面の姿を発見するなどして、ほんとうに心の底から人間的でざっくばらんな交流ができました。私はこの懇親会の席で、酒の飲みかたはもちろんのこと、教員という立場を越えた、人間同志のありかたなどについても学びましたが、この体験が以後の私の人生に大きく影響を与えてくれたことは言うまでもありません。

津山高校時代で逸することのできないもうひとつ出来事に、結婚という誰もが通過

する儀式があります。それまで比較的気ままな独身生活を送っていた私は、あじけないどんぶり飯の生活にも少々飽きがきて、人並みに結婚を考える年齢に達していました。文学を研究していたわりには、この方面のことに私は晩熟でしたので、周囲の人が勧めてくれる女性と見合いを二度試みました。その二度めの見合いの席で、人生の伴侶となる現在の妻と知り合って、結婚しました。昭和四十四年十月のことで、私が二十九歳、妻が二十三歳でした。この女性は、小学校の校長をしていた私の父の校長仲間で、その校長の親戚の娘でした。彼女は同志社女子大学で食品科学を学んだ由で、私とはまったく異なる分野で勉強した女性でした。私は結婚相手には自分とは異なる分野で勉強した女性のほうが、自分の足りない方面のことを補完してくれるだろうという安直な考えを抱いていましたが、それ以上に、彼女が私とほぼ共通する考えかたの持ち主であったということが、私が彼女に魅力を感じた最大の理由でした。要するに、彼女とは自然体で接することができそうだと感じたわけです。そのうえ、彼女の父親は中学校の校長であったので、私とほぼ同じ家庭環境に育った彼女とは、将来、貧乏生活に遭遇しても、お互いに協力しあって結婚生活を営むことができそうだと判

我が人生に悔いなし

断して、結婚に踏み切った次第です。

そんなわけで、私たちは結婚することにはなりましたが、新居などはまったく予定もしていませんでした。ところで、津山高校には男女別々の寮があつて、ちょうどそのころ、女子寮の舎監住宅が新築されていて、私は「いったい誰が入るのかなあ」と思っていましたところ、教頭から「三村さん、あなた女子寮の舎監になってくれませんか。手当ても出ますよ」と打診があつて、無理やり私は舎監にされてしまい、その新築の舎監住宅に住むことになりました。またしても、私の人生行路では思いがけないことが生じたわけで、美空ひばりの歌謡曲ではありませんが、「人生とは不思議なものですね」。

女子寮の舎監住宅での結婚生活はそれ以後、郷里の高梁高校に転勤する昭和四十九年三月まで続きましたが、私の教員生活での結婚は、私に種々様々な面で新たな発見や認識を経験させてくれました。特に二人の子供に恵まれた私たち夫婦は、子育てというこれまで経験したことのない局面に遭遇しましたが、その過程で、子供の養育がいかに手のかかる大事業であるかを実感するとともに、子供を育てることがいかに楽

しい夢のある営みであるかということも、身をもって体験しました。いろいろな考えかたがありますが、私の場合、子供を持って初めて、教育の重要さを認識した次第です。こんなにも親の手を焼かせて成長した生徒にかかわっているからには、教育を担当する教員として私は、もっともっと生徒に情熱を注いだ教育実践に励まなければという思いに駆られないわけにはいきませんでした。

余談を言いましたが、こんな調子で津山高校での教員生活を送っていたとき、父が病気に倒れ、昭和四十七年七月、家族の看病や薬石の効もなく、不帰の客となってしまいました。ちょうど還暦を迎えた六十歳のときでした。私はそのとき初めて無常感を味わいましたが、郷里の成羽では母がひとりで生活することになりましたので、私は津山高校から郷里にある高校への転勤を考えました。結局、二年後の昭和四十九年四月、岡山県立高梁高等学校へ転勤することができましたが、高梁高校は校長をはじめ、津山高校と違ってサラリーマン教員の集団という感じで、まったくおもしろくない高校でした。同じ県立の高校でも、こうも違うのかと思われるほどの味気ない教員生活でしたので、郷里に帰っての教員生活については省略に従いたいと思います。

我が人生に悔いなし

そんなある日、私は帰宅後、家の前の川原に出てはえ釣をしていたところ、五歳になったばかりの長女が「パパ、電話がかかっているよ」と、私を呼びにきました。電話に出てみると、母校の大阪大学の助手からで、「妙心寺という禅宗のお寺が経営母体である花園大学が、あなたをほしいと言っていますよ」と伝えてくれました。そのころ、私は研究には従事していましたが、研究職への就職のことなどまったく関心外でしたので、たいへん驚嘆しました。あれほど研究職につきたいと念願していたときには、就職の話はまったくなくて、そのことをほとんど忘れかけているときに、こんな朗報がくるとは、人生とは皮肉なものだな、とそのときには心底そう思いました。このような次第で、妻からも賛同を得た私は、母をひとり郷里の成羽に残しての出発は少々気がかりでしたが、とにかく、京都の花園大学へ出向くことになりました。昭和五十二年四月のことで、私もすでに三十六歳を迎えていました。

花園大学時代

こうして私はやっと念願の大学の研究職に就くことになったわけですが、花園大学はそのとき、妙心寺の東隣りにあった学舎から現在の中京区西ノ京壺ノ内町に移転しましたので、この移転は偶然、私の新天地への転出と歩調を合わせる結果となりました。住居も社会福祉学科の長尾憲彰教授のお世話で、小倉山の麓にあるご自坊の常寂光寺の離れを無料で借り受けるという好運に恵まれました。山田無文老師が学長の花園大学では、私は専任講師のポストにつきましたが、当時の花園大学は、若い教員には勉学に励んでもらいたいという規程があつて、教授が六コマ、助教授が五コマ、専任講師が四コマという担当コマ数でしたので、四コマの担当で済んだ私は猛烈に勉強し、その年には五本ほど論文を書きました。同僚の教員には、中古文学の土岐武治、近世文学の鷲山樹心の両教授、近代文学の芦谷信和助教授などがいらつしやいました。が、私は中世文学を担当しました。『新古今集』『徒然草』などを教えました。高校

我が人生に悔いなし

教員を経験していた関係で「国語科教育法」も担当しました。この時期は何もかもが初めての経験であったのと、学問的情熱に燃えていましたので、わたしはがむしゃらに働きました。学生諸君もよく勉強し、ほかの教授陣が比較的年輩の方がたであったためか、私の講義には大勢の学生が集まり、たいへん活況を呈しました。花園大学での研究者としての出発は、このような次第で、まことに好調でしたが、ただひとつ困ったことがありました。それは、現在はどうだか存じませんが、当時の花園大学からいただく給料は、県立の高校で得ていた給料よりも安く、京都で一家四人が生活するにはやや不十分な額でした。そこで同僚のひとりが予備校を紹介してください、私は予備校に週に一度出講して、生計を立てる補助にしました。

その予備校は駿台予備学校京都校でしたが、この予備校はみなさんよくご承知のように、東京では東京大学に多数の学生を入学させるという実績を持つ、その方面ではたいへん有名な予備校でした。私はその予備校で「古文」の教科を担当しましたが、意外にも結構人気を博し、高額講師料を獲得することになりました。何がそのような結果を招いたのか、その理由を考えてみますと、それは私がこれまで津山高校とい

う進学校で、受験勉強にも対応しうるような授業を展開していたからではないでしょうか。研究者としての仕事先が確保できなくて、高校という教育機関に身を置いて、一生懸命精進していたことが、逆に、大学院から直接研究者になった人たちよりも、受験という業界では、有効に機能したわけです。自分自身が直面した現実を精一杯努力して生きていると、それがいざとなると、結構役立つものなんですね。私はこのときほど、「進学校で高校教員をしていてよかったなあ」と実感したことはありませんでした。

ところで、予備校に出講して一定の生活費を稼ぐことができるようになったことは、派生的に私にもうひとつの好運を与えてくれることになりました。それは、私には二人の子供があるとさきに申しましたが、二人とも娘でした。妻は長女には郷里にいた、三歳のころからピアノを習わせていましたが、それが京都に出て、多少生活にゆとりが出てきた関係で、私たちは娘を優秀な先生につけて、本格的にピアノのレッスンを受けさせることが可能になったからです。世間には、大学の教師が予備校などに出講して、本職以外のアルバイトに精を出すことに批判的な人びとも少なくありませんが、

我が人生に悔いなし

私はこのアルバイトのおかげで、娘たちに充分とはいえませんが、将来に向けて、ある程度の方向性を見出す教育をつけてやることができたこと、駿台予備学校に感謝しています。娘のことについては、やや詳細に後述する予定ですが、ともあれ、直面した現実を精一杯生きていけば、何が幸いするかわからないということを、薄給の花園大学でも私は実体験したのでした。

花園大学で研究職につくことのできた私の歩みはその後、順調に進み、二年後の昭和五十四年四月には助教教授に昇進しました。この時期の私は研究・教育ともに絶好調で、毎年、数多くの論文を執筆することができました。「あいつはアルバイトで予備校に出講しているのです、論文執筆を疎かにしている」という非難を受けないためにも、一生懸命に研究に専念しましたので、花園大学での論文執筆数は、私が一番でした。また、私は教育面でも学生指導を怠りませんでした。私は手初めに、高校の教員の経歴をいかして、正規のカリキュラムにはない教員採用試験に向けた自主ゼミを設定して、放課後に「漢文」の演習を試みてみました。すると意外にも好評で、練習した問題が実際に採用試験に出題されたりして、学生たちが大喜びすることもありました。

この「漢文」の自主ゼミはその後、大学当局の知るところとなって、正規の講義として登録され、私は手当てまでも貰うという恩恵に浴しました。そんな助教教授時代を七年間過ごして、私は教授になりました。

それは昭和六十一年四月のことで、私は四十五歳を迎えていました。花園大学の昇任人事の規則には、教授職は四十五歳からと規定されていた関係で、助教教授を七年も勤めたわけです。私の研究・教育は教授に昇任してもあい変わらずで、量産した論文はかなりの数に達していました。ちなみに、そのときの研究テーマは私撰集研究でしたが、教授になる前年に、一連の研究を体系的にまとめて『中世私撰集の研究』（和泉書院）を出版しましたので、その後は類題集研究に没頭しました。

このような次第で、私は花園大学に職を得た後は、研究に没頭するかたわら、教育活動にも一生懸命はげんでいました。教授会などの会議の席ではほとんど沈黙を保ち、発言を控えていました。それは研究・教育以外の雑事にはあまり関心がなかったからですが、教授になってしばらくして、学科主任をつとめることになって、状況は一変しました。というのは、学科主任が予算会議などで沈黙を保っていると、他学科

我が人生に悔いなし

に予算面で先を越されたりするなど、学科間で不利益を蒙ることが生じるからです。そういうわけで、私も国文学科の代表として正当な権利の主張をしないわけにはいかなくなって、それ以後は委員会はもちろん、教授会などでもしばしば発言をするようになりました。そうになると、困ったことが生じました。それは学問研究とは異なる管理職に選ばれるという局面に遭遇するという事態でした。誰でもそうだと思いますが、私は学問研究のためにはどんな困難も厭いません。しかし、管理職というかなり政治色の濃い役職はどうも私の肌に合わないのです。とはいえ、そんな身勝手な考えが通用するはずはなく、花園大学では規則によって二年に一度選挙が行なわれ、学部長、教務部長、学生部長、図書館長などの部館長が選ばれる制度になっていました。そういう次第で、教授職に就いて数年経たある年度に、この部館長を選ぶ選挙が行なわれた際に、私は図書館長に一位、教務部長に二位という、私にとっては不名誉な結果が出ました。幸い、図書館長にはもう一人、六十代の教授が同数票を獲得しておられた関係で、私は危うくその職に就任することはまぬかれましたが、次回の選挙にはおそらく、部館長職のどれかのポストに選ばれるのではないかという危険な状況が生じま

した。そうすると、管理職などもつてのほかの私は、安閑と学問研究などしておられなくなることは必定です。「困った事態に陥ったことだなあ」と思案にくれていたときに、友人の光華女子大学の山本登朗氏から「うちで中世文学の専任を探しているので、よかつたらきませんか」という打診があつたわけです。花園大学に就職して、思う存分教育研究に専念できていた私には、管理職への就任という困った事態を除くならば、この大学に不満など一切ありませんでした。しかし、花園大学に就職してすでに十年以上が経過してしまいましたので、私もいろんな面で多少、マンネリズムに陥つていたことは否めません。そのうえ、山本氏によれば、「光華女子大では、管理職を選挙で選ぶなんてことはありません。勉強だけに専念しておればいいんです」ということでしたので、私はそのとき光華女子大学に対して、自分にとつてうつつの、まさに理想的な大学だという印象を抱きました。家に帰って妻にこのことを相談したところ、彼女は「あなたの好きなようにしたら」と言つて賛意を示してくれましたので、私は一決し、光華女子大学への転勤がこうして決つたわけです。高等学校へ十年あまり勤務して花園大学へ転出した私は、十三年間お世話になつた花園大学と別離の涙を

流して、新天地である光華女子大学へと足を踏み入れることになったのです。

京都光華女子大学時代

このような次第で、私は平成二年四月から光華女子大学で勤務することになりました。私がキャンパスに足を踏み入れてまず驚いたのは、さすが女子大だけあって、キャンパスがきちんと整備されて、まことにきれいな女子学園であったことです。前任教の花園大学は、名前こそ「花園」という美麗な名称でしたが、男女共学でしたので、キャンパス内はその名とは裏腹にたいへん殺風景な空間でした。ただ、女子ばかりのキャンパスであることに対しては、前任校の私のゼミは、共学にもかかわらず、ほとんど女子学生で占められていましたので、それほど驚きはしませんでした。それ以上に驚いたことは、私が指導した初期の学生諸姉が、予想した以上に知的好奇心に富み、研究熱心で、活気に満ちていましたので、ゼミ演習が楽しく運営できたことでした。光華女子大に移って、心機一転した私自身も、水を得た魚のように論文を量産しました。

我が人生に悔いなし

が、この点については、ほとんど花園大学の場合と変わりませんでしたので省略に従いたいと思います。

私は「光華女子大に転勤してほんとうによかったなあ。これで性に合わない雑事からも解放されて、思う存分、教育研究に邁進できることだ」と心底実感し、至福のひとときに浸っているのもつかの間、山本氏が私に確約してくれていたことは正反対の事態に直面することになりました。それはそれまで管理職などの任命は、トップ・ダウンの管理方式であったのが、私が教授会員になったとたんに、その年度から部長の任命は教授会の選出を経て行なわれることが、教授会で決定したからです。「なんと皮肉なことだ。これでは花園大学からわざわざ転出して、光華女子大にきた甲斐がなかったなあ」と思う一方、「これが自分の宿命なのかなあ」とも思って、私は前向きに考えることにしました。

光華女子大学に移籍した当初は、花園大学の場合とほぼ同様の教育研究生活でしたが、平成五年度は私にとって意味のある年度になりました。というのは、光華女子大学にも大学院を設置したらという機運が生じていたからです。当時、私は日本文学科

我が人生に悔いなし

の主任をしていた関係で、大学院設置の準備に携わることになりました。そんなある日、立命館大学で中世文学会が催されていた席上で、大阪大学の信多純一教授と遭遇しました。そこで私は「このたび、勤務校でも大学院の修士課程を設置することになり、文部省の審査でマル合教授になるのには、学位を取得していたほうが好都合のようですので、阪大に学位請求をしてもかまいませんか」と、厚かましくも打診したところ、信多教授は即座に「ああ、いいよ」と応じてくださいました。そんなわけで、私は学位取得の準備で、急にあわただしくなりました。そこでまず私が始めたのは、これまでに書きためていた論文の抜刷を集めて目次を作成し、全体の構成からみて足りない部分の各論を執筆して、その後、総論を書くという構想を立てました。それと同時に、私は学位請求論文としてまとめた原稿の出版を計画して、和泉書院の社主・廣橋研三氏と相談した結果、文部省の科学研究費をもらって刊行することによって合意を得ました。この出版計画はさいわい、平成五年度の文部省科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の対象に採択されて、補助金二百七十万円の援助を得て、学位請求論文『中世類題集の研究』は平成六年一月、めでたく誕生しました。ともあれ、この

一年はまことにあわただしい一年で、肉体的には疲労困憊の状態でありましたが、私にとってはこれまでにない、精神的には充実した年度であったように記憶しています。

さて、『中世類題集の研究』が刊行されましたので、私はこの書籍三冊を手にして大阪大学文学部の事務室を訪れ、文学博士の学位請求の手続きを完了しましたが、それは平成六年一月二十五日のことでした。学位請求書が受理されたあとは、口頭試問が待っていました。その日は同年九月のことであつたと思いますが、私は主査・伊井春樹教授、副査・信多純一、前田富祺の両教授から試問を受けました。審査論文はさきに言及した「中世類題集の研究」でしたが、正直いって、この分野の研究では審査の教授陣より私のほうが一枚上でしたので、私はそれほど緊張もせず、気楽に試問を受けることができました。その試問内容の一部を紹介しますと、私自身疑問としてい

る箇所

に質問の大半は及んだと記憶していますが、私が「その点については、現時点ではよくわからないので、不明として

いるわけですが、先生はどのような見解でしょうか」と、逆に質問しますと、先生がたは「それでは、次の質問に移りましょう」と曖昧な返答をされて、試問は先に進むという具合のものでした。世間では、博士論文

我が人生に悔いなし

の試問というところ、たいへん厳肅な状況下で厳格に行なわれるものと誤解して、学位論文の執筆を敬遠している研究者もあるやに仄聞してはいますが、そんなことはまったくありません。この会場にいるみなさんがたも、将来その気になった場合には、どうぞ遠慮することなく学位論文の執筆に挑戦してみてください。このような経緯で、平成六年十二月五日、私は大阪大学から博士(文学)の学位を受領することができました。ちなみに、学位授与式のことにはふれておきますと、大阪大学では学位授与者には、家族同伴で授与式と祝賀パーティーへの出席の依頼があつて、私は大阪大学の本部に出かけたことが一度もありませんでしたので、妻と娘二人と連れだつて、万博公園の近くにある阪大の本部に向き、総長の金森順次郎氏から博士(文学)の学位を授与されました。授与式のあとに催された祝賀パーティーでは、関係者が大勢集まつてなごやかな雰囲気のもとに祝宴が展開し、私たちは楽しいひとときを過ごすことができましたが、その宴の最後までわが娘たちが居残つてビールを飲んでいたので、日ごろのわが家の家庭教育の貧困な実態を見せつけられたようで、私は少々困惑しました。このような次第で、私の学位取得は光華女子大学に移籍して四年めのことでしたが、

それに続いて清水康次教授も京都大学で博士(文学)の学位を取得された結果、日本文学科の教授陣はこの二人に山本登朗、神谷かをるの両教授、すでに学術博士の学位を取得されていた肥留川嘉子助教授の五人の強力スタッフになって、さきに言及した本学に大学院文学研究科修士課程を設置しようという計画がにわかにな本格化しまして、その設置準備室が開設され、私はその室長を拝命することになりました。ところで、文部省の指導によると、大学院文学研究科を設置する際には、複数の専攻が必要ということでしたので、私は英米文学科にもはかって、本学大学院文学研究科には二専攻を設置することが教授会で決定しました。なお、英米文学科の大学院設置にかかわる諸問題については、平川泰司教授が担当なさって、私は不案内でしたのでここでは省略に従います。

さて、設置準備室長としての私には、論文執筆、講義のほかに大学院設置に向けての書類づくりなどの仕事に加わることになって、その結果、私は事務局の職員の方がたと何度も文部省に足を運ぶことになりました。それまでに聞いていた話では、文部省の役人は話のわからない人が多くて困るといふ噂でしたが、実際に文部省の役人と

我が人生に悔いなし

の折衝では、相談に出向くたびに担当官が変わって、前回とは異なる難題を持ちかけることがありましたが、私が「その問題は前回解決した問題ですので、なぜ今回新たに提案されるのですか」と反論すると、担当官は「ああ、そうですね。失礼しました」といって、それを引つ込めて、こちら側の相談に気持ちよく乗ってくれました。

私の印象では、文部省の役人も人間ですから、こちらがあまりに卑屈な態度で接すると、相手が尊大な態度を取っているように見えるのではないかと思いました。他人はともかく、文部省の役人といえども、こちらが一生懸命に誠意を持って相談に臨めば、それ相応に対応してくれるものだという実感を、そのとき私が得たのは事実でした。

そんなわけで、大学院設置の準備段階ではいろんな面で四苦八苦はしましたが、新しい教育機関の誕生という喜びなども手伝って、この計画は意外にとんとん拍子に進んで、開設までには少々時間がかかったとはいっても、ついに私たちは本学に大学院を開設するに至ったのです。それは平成十年四月のことで、その名称は光華女子大学大学院文学研究科修士課程日本語日本文学専攻・英語英米文学専攻というものです。

ところで、平成十年四月には、文学部長が兼務していた教務部長職を別個の独立し

た部長職にしたい、という高屋慶一郎文学部長の提案が教授会で承認され、教務部長の選挙が行なわれた結果、私を選ばれました。私は高屋文学部長の提案がもつともだと考えましたので、教授会の席上で、賛成の旨の見解表明をしたために、教務部長に選ばれるという不運な結果になったのでした。「口は災いのもと」とはよく言ったもので、そのときには教授会員のみなさんを恨みましたが、「身から出た錆」で、自身の不徳を噛みしめました。高屋教務部長の残任期間は一年間でしたので、私は一年間のみこの部長職に就きましたが、しかし、その年には次期の文学部長の選挙が控えていた関係で、私が教務部長の職にいたことはたいへん不利な状況であったことは否めませんでした。案の定、その年の年度末に行なわれた次期の文学部長の選挙では、私はその候補の一人に選ばれて、結局、私が決戦投票の結果、次期の文学部長に決定したのでした。

そんなわけで、私は平成十一年四月から文学部長をとめることになりました。なんの因果か、管理職に就くのがいやで、花園大学から本学へ転職をはかったのに、その管理職である文学部長になったわけです。しかし、そのとき私は五十八歳になって

我が人生に悔いなし

いましたので、この年齢ではいくら逃げても逃げ切れるものではないと観念して、この部長職を素直に引き受けることに決めました。ちょうど、その年度は学長職も交替時期で、新学長には高木英明教授が選ばれましたので、私は文学部長として微力ながら、高木学長のもとで一生涯懸命に働こうと覚悟して、そのように実践しました。とはいえ、一方では教育研究も疎かにはできませんので、朝はやく起床して、論文執筆に励んだことは言うまでもありません。学会発表もほぼ年一度のわりで継続的に行なっていました。そんな無理で多忙な生活が続いたせいか、確か翌年の秋に北海道の藤女子大学で催された、和歌文学会の全国大会で発表して帰ったころ、目まいがして、身体に不調を覚えました。というのは、私はお酒が好きで、毎日晩酌を欠かしたことはありませんでしたが、それ以上に宴会が好きでしたので、身体的にむちゃをしすぎているからでしょう。自業自得なのでしょうが、さすがの私も弱ってかかりつけの医院を尋ね、血液検査を受けた結果、血糖値が二百八十三、コレステロール値が三百九十六という数値で、成人病のため即刻入院という診断がくだされました。入院などする暇はありませんから、私は食品科学専攻であった妻の管理のもとで、一日、千六百

カロリーの食生活を余儀なくされる羽目に陥りました。もちろん、お酒は一滴も飲ましてもらえませんでしたので、たいへんに辛い毎日が続きました。いちばん困ったのは、一日、千六百カロリーでは、生きているのみという状態で、研究意欲などがまったく沸いてこない、まるで植物人間のような感じしかない日常生活であったことでした。しかし、そんな貧困な食生活を一ヶ月ほど続けた後、医院に出かけて、血液検査を受けてみますと、なんと血糖値もコレステロール値もすっかり正常値になっていましたので、私は毎日の生活を節制して送れば、身体はもとどおりの健全な状態に近づき、以前のような教育研究生活に復帰できるという自信を得て、ほんとうにホッとしました。おまけに、体重も七キロほど減量できて、身体がかなり軽く感じられるようになりました。この成人病にかかったおかげで、私は「何はともあれ、無理をすることなく、年齢相応の生活を送るのがいちばんだ」という教訓を得ることができましたが、これを「怪我の功名」と言ったらオーバーすぎるでしょうか。

このように病気を煩って以降、私は身体に気をつけながら、文学部長職と教育研究の仕事をこなしている間に、はやくも任期の二年が経過しましたが、不本意なことに、

我が人生に悔いなし

私は教授会で再任され、あと二年間文学部長職に専念しなければならぬことになりました。ちなみに、私が文学部長に再任されました平成十三年四月、本学は校名変更をして「京都光華女子大学」となりました。この期間においても再任前の二年間と同様に、相かわらず多忙な毎日が引き続いて、これといった特筆すべき出来事も生じませんでしたので、この間のことはここでは省略に従いたいと思います。

そうして二年間を無事に過ごして、これでやっと文学部長職からも解放されると思っていた平成十五年四月、私は予想もしない事態に遭遇することになりました。それは今度は高木学長の後任として、私が新学長に選ばれてしまったからです。学長職は任期が四年間ですから、これで私はあと四年間は純粹に学問研究生活に没頭する余裕がなくなり、実際、そんな悠長なことは言っておられない状況に陥ったわけです。私が新学長に選任されるに至った経緯については、学長選出委員でなかった私の承知するところではありませんが、とにかく、人生というものはまことに、予想したとおりにはいかないものだということを、このたびも私は身にしみて実感しました。

ともあれ、私は平成十五年四月から、向こう四年間、学長職に就くことが理事会で

も承認されましたので、私は覚悟を決めました。ちなみに、学長就任にあたっての抱負などについては、後に『学園報』VOL. 39（平成十五年七月発行）に所感を表明しましたので、ここにそれを転載しておきたいと思います。

就任のご挨拶

三村 晃功

このたび、四年間の文学部長の職に引き続き、はからずも学長職に就くことになりました。折から、大学経営が厳しい「冬の時代」のさなかの就任ゆえに、未曾有の試練に迫られる一方、だからこそ逆に、やりがいのある時期に選ばれた運命を、神仏のご加護と喜ぶべきかも知れないと、就任して三箇月ほど経過したいまは、実感しています。

ともあれ、以下は、学長就任にあたって、わたし自身が抱いていた率直な夢と抱負ですが、五つに要約してみました。

その第一は、大学に、本学園の上部機関としての魅力的で充実した教育体制を

我が人生に悔いなし

確立し、設立当初のような活力ある、光り輝く女子の高等教育機関の殿堂にした。具体的には、建学精神を体现した「こころ」の陶冶を中心に教育実践につとめ、本学の属性を社会に周知させて、やる気のある数多くの学生を集める実践に鋭意、取り組んでいきたいと考えています。

その第二は、学生にとって、教室およびキャンパスが、各自の夢が実現する、厳しいなかにも充実した時空間として機能し得る、知的訓練の場になるようにつとめたいと考えています。

その第三は、教員にとって、教育・研究面で、各自の個性が十二分に発揮できるように、教育環境の整備、充実につとめ、優れた教育・研究の成果が数多く生まれるように、誠心誠意頑張りたいと考えています。

その第四は、職員にとって、働く意欲がわき、仕事のやりがいがある、厳しいなかにも楽しい職能集団になるように、極力応援したいと考えています。

その第五は、それぞれの分野で、各自自立して活躍している卒業生のみなさんが、母校を訪れた際に、心のやすらぎを感じ、再度訪問したくなるような、ア

ト・ホームな精神的な雰囲気をさらに醸成するとともに、人文・社会・自然の三領域を一応、擁するに至った、本学の現在の充実、整備された教育環境と内実を見て、心の底から有縁者のみなさんに、本学の良さを喧伝してもらえような、種々の面での環境づくりと人的交流の活性化をいっそう進めたいと考えています。

要するに、わたしは本学に関わり、関わった人びとが各自、本学に身を置いたことで、心の底から充足感を覚え、生き甲斐を感じて、快適な知的生活空間の場であったと、肌で実感できるような、そんな大学づくりに精励したいと考えています。

このような次第で、私は本学に転出して十四年めにはからずも、学長に就任することになり、大学、短期大学の管理運営を、教学サイドと経営サイドの両面から担うひとりになりましたが、これは非力な私ひとりの手にとうてい負えることではありません。そこで私は「就任のご挨拶」にも紹介しましたような考えかたに立って、本学をほかのどの大学とも異なる、ユニークな教学展開のできる女子大学にするという目

我が人生に悔いなし

標のもと、こころ豊かで、自分自身の独力で未来を切り開くことのできる能力を備え持った近代女性の育成、輩出に向かつて、教職員・学生・保護者のみなさんと一丸となった教学運営の実現を企図したわけですが、すべては今後、本学に関係するみなさんとともに、この目的を達成するために、どれだけ有機的な関連を保ちながら、教育実践に邁進できるかという一点にかかっていると考えるでしょう。いまはこの目的達成の一日もはやい実現を夢みるしか方法はありませんが、最後に付言として、私のふたりの娘たちと、私の研究歴に言及しまして、この拙ない学長講話を締めくくりたいと思います。

わが娘たち

私たち夫婦にふたりの娘がいることについては、さきに言及しましたが、ここでわが娘たちに話が及ぶことをお許しください。ちなみに、わが娘たちのことについては、過年、本学同窓会「ふかみぐさ」の会報『京都支部だより』（平成十一年十二月十日発

行)に拙稿を寄稿しましたので、ここにはそれを転載したいと思います。

仕事か結婚か ―わが娘の生きざま―

三村 晃功

わたしには二人の娘がいる。長女は二十八歳、次女が二十五歳で、ともに京都市立芸術大学ピアノ科を卒業している。なぜ二人ともピアノを習わせたのかと、よく聞かれるが、他意はない。手に技術を付けておくと、将来何かあったときに役立つのではないかという、妻の単純な発想に基づいての所業にすぎない。

ところが、妻の敷いた路線を順調に歩んでいるのは長女のほうで、妹のほうは現在、ピアノに見切りをつけて、専業主婦に従事している。

もともと長女は人に管理されるのが嫌いなたちで、大学に入っても専任の教授陣には付かず、気に入った非常勤講師の先生に師事して、自己の思いどおりに独自の活動をしていた。その結果、在学時には、いわゆる優等生ではなかったが、卒業したあとは、ほかの卒業生が右往左往しているのをよそ目に見て、思う存分

我が人生に悔いなし

自由奔放に活躍し、いまは二年がかりでドビュッシーのピアノ曲全曲シリーズの演奏に挑んでいる。仕事に全身全霊で打ち込み、結婚にはまったく関心はなさそうである。

いっぽう、妹のほうは、大学の三年次のときに、突然、結婚すると言い出した。ピアノも未完成の段階だし、結婚は卒業してからでも遅くはあるまい、という親の忠告などにはまったく耳を貸さず、さっさと自己の思いを実現してしまった。現在、二児の母親として育児に専念しているが、ピアノの道を断念したことにはそれほど未練はないようである。

わが娘の生きざまは、それぞれ両極端といえるほどに、別々の様相を呈している。しかし、どちらも自己の選択した道を、自信をもって歩んでいるのか、そこには不安など微塵も感じさせない。明るく、生き生きとした表情には、まさに青春を謳歌しているといわんばかりの力強ささえ感じさせる。娘たちには、仕事か結婚かの二者択一の選択など、無意味な発問のようである。

わが娘の生きざまをみていて、十一代続いてきたわが三村家は、私の時代で終

わるのであろうか。このことだけが目下、心配の種である。

この記述内容は平成十一年二月ごろに執筆されたものですが、現在、長女はプロのピアニストとして活動するかたわら、京都女子大学に非常勤講師としても出講しています。一方、次女のほうはもうひとり女子に恵まれて、現在、七歳の長男、五歳と三歳の長女・次女の三人の子供に囲まれて楽しく毎日を過ごしているようです。娘たちへの私の教育方針は「何事に対しても、精一杯努力して、一番になりなさい」というものでしたが、その結果、二人のわが娘は、このような両極端の生きかたをする二種類のタイプの成人女性に結実したわけです。それは、まるでこれからの女性の生きかたを象徴するような、典型的な対立の構図にある女性のタイプといえるでしょう。このどちらのタイプが真の女性にふさわしい生きかたなのかについては、いまずぐに私には判定できませんが、わが娘がこの二つのタイプに分類される典型的な女性の生きかたを実践しているのは、興味深い現象といえるのではないのでしょうか。

我が人生に悔いなし

わが研究歴

最後にもうひとつ付言しておきたいのが、私がこれまで歩んできた研究歴についてです。私が大学の学部から大学院時代に「源氏物語」を対象に研究を進めていたこと、そうしてその後、岡山大学付属図書館蔵の池田家文庫の整理に従事した際に、「六花抄」なる歌書を発見して、研究領域が物語から和歌に方向転換したことなどについては、すでに言及したとおりです。それでは、その後の私の和歌研究はどのように進展していったかといいますと、研究領域が私撰集および類題集へと拡大して、その研究方法も文学論研究から文献学研究へと転換していったことが最大の特徴といえるでしょう。そうして現在、文献学の研究対象としては、室町後期ごろから江戸時代初期ごろにかけて天皇を中心に営まれた、宮中における歌会歌を集大成した『公宴統歌』の成立の問題を追究する一方、西行や兼好などの隠遁歌人の文学研究へも関心が復活して、私の和歌研究は、研究領域も方法もバラエティーに富んだ方向へと進展して、一

言でいいますと、多彩な和歌文学研究の展開と要約できるでしょうか。

ところで、それらの具体的な諸事象に言及するとなりますと、かなりの時間を要しますので、以下には、私がこれまでに執筆してきた論文の類いについてはかなりの数に達していますのでここでは一切省略に従うことにして、書物として刊行された書目についてのみ列挙することにいたします。

〈著書〉

1	中世文学の世界	共著	昭和59年5月	世界思想社	p 81 ~ 104
2	王朝和歌の世界	共著	同年10月	世界思想社	p 132 ~ 149
3	中世私撰集の研究	単著	同60年5月	和泉書院	p 442
4	講座平安文学論究	共著	同61年7月	風間書房	p 33 ~ 61
5	叡山の文化	共著	平成1年6月	世界思想社	p 154 ~ 172
6	和歌史の構想	共著	同2年3月	和泉書院	p 333 ~ 353
7	老いと死の周辺	共著	同年11月	法政出版	p 313 ~ 369

我が人生に悔いなし

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
日本古典文学を読む	歌論歌学集成 十一	日本文学と美術	仏教文学とその周辺	恋のかたち	物語・日記・随筆	和歌の伝統と享受	中世文学研究	風呂で読む西行	中世類題集の研究	中世の和歌	叡山をめぐる人びと	女と愛と文学	新古今集と漢文学	続五明題和歌集	叡山の和歌と説話
共著	共著	共著	共著	共著	共著	共著	共著	単著	単著	共著	共著	共著	共著	単著	共著
同14年2月	同年7月	同13年2月	同10年5月	同年12月	同年4月	同8年3月	同年6月	同7年2月	同	同6年1月	同年5月	同5年1月	同	同4年10月	同3年7月
和泉書院	三弥井書店	和泉書院	和泉書院	和泉書院	勉誠社	風間書房	和泉書院	世界思想社	和泉書院	勉誠社	世界思想社	世界思想社	汲古書院	和泉書院	世界思想社
P 217	P 43 { 67	P 95 { 115	P 355 { 376	P 93 { 117	P 215 { 237	P 129 { 156	P 155 { 192	P 102	P 769	P 131 { 150	P 91 { 114	P 145 { 165	P 67 { 82	P 441	P 75 { 100

24	古代中世文学論考	共著	同年7月	新興社	p 314 } 347
	(編著)				
1	六花和歌集	共著	昭和47年8月	古典文庫	p 287
2	六花集注(彰考館本)	共著	同49年7月	古典文庫	p 170
3	明題和歌全集	单著	同51年2月	福武書店	p 551
4	同全句索引	单著	同	同	p 456
5	六花集註(蓬左本)	共著	同52年2月	古典文庫	p 407
6	宝治百首	共著	同53年3月	福武書店	p 147
7	為季集(松平本)	单著	同54年6月	古典文庫	p 330
8	濟継集(松平本)	单著	同57年2月	古典文庫	p 310
9	伯母集	共著	同58年12月	古典文庫	p 405
10	中世百首歌 三	共著	同59年12月	古典文庫	p 370
11	顕季集	单著	同60年10月	古典文庫	p 438
12	新編国歌大観 四	共著	同61年5月	角川書店	p 666 } 675

我が人生に悔いなし

27	26	25	24	23	22	21		20	19	18	17	16	15	14	13
文保百首 宝治百首(横本)	大嘗会和歌(縦本)	叡山文庫 天海藏識語集成	同 索引編	公宴統歌 本文編	同 下	明題拾要抄 上	和歌懐紙	中世百首歌 七夕御会	新編国歌大観 十	同 下	摘題和歌集 上	同 八	同 七	同 六	同 五
单著	单著	共著	共著	共著	单著	单著		单著	共著	单著	单著	共著	共著	共著	共著
同15年4月	同15年4月	同12年7月	同12年2月	同12年2月	同9年8月	同9年7月		同8年6月	同4年4月	同3年1月	同年11月	平成2年4月	平成1年4月	同63年4月	同62年4月
朝日新聞社	朝日新聞社	私家版	和泉書院	和泉書院	古典文庫	古典文庫		朝日新聞社	角川書店	古典文庫	古典文庫	角川書店	角川書店	角川書店	角川書店
p 391	p 171	p 454	p 1091	p 629	p 336	p 411		p 396	p 349 } 359	p 332	p 430	p 82 } 256	p 766 } 773	p 413 } 648	p 755 } 759

《事典・辞典類》

1	和歌の解釈と鑑賞	共著	昭和54年4月	旺文社	19項目
2	日本文学史辞典	共著	同57年10月	京都書房	14項目
3	日本古典文学大辞典 1～6	共著	同58年10月～ 同59年10月	岩波書店	19項目
4	和歌大辞典	共著	同61年3月	明治書院	40項目
5	古典和歌必携	共著	同61年7月	学燈社	10項目
6	日本名歌集成	共著	同63年11月	学燈社	9項目
7	大歳時記(歌枕俳枕)	共著	平成1年10月	集英社	11項目
8	新古今和歌集を読むための研究事典	共著	同2年12月	学燈社	2項目
9	日本古典文学大事典	共著	同10年6月	明治書院	29項目
10	日本古典籍書誌学辞典	共著	同11年3月	岩波書店	10項目
11	歌ことば歌枕大辞典	共著	同11年5月	角川書店	9項目

我が人生に悔いなし

おわりに

以上、「我が人生に悔いなし」という演題でながながとお話ししてまいりましたが、ここでこれまでに述べてきたことを要約して、私の拙ない講話を締めくりたいと思います。ところで、私がこれまで歩んできた人生行路を一口で申しあげますと、それは「人間万事塞翁が馬」とも、「禍福は糾える縄のごとし」ともいえる種類のもので、何が幸福になり、何が不幸になるかを、あらかじめ予知することのまったくできない歩みであった、と申しあげることができないのではないのでしょうか。それは私の歩みの節目節目で生じた事例を思いかえしていただくならば、一目瞭然でしょう。高校三年次には、大学へ進学したら英文学を学ぼうと決心していたにもかかわらず、現実には第二志望の国文学科へまわされたために、今日の私の専門が国文学となったわけですし、大学院への進学も、教授から第一番に推薦された東北大学大学院ではなくて、大阪大学大学院へ進学したために、小島吉雄教授など和歌文学研究の権威者から、和歌

の専門的知識、素養を十二分に身につけることができました。そうして、私はそのまま大学院博士課程に進学するはずであったのに、母校の岡山大学から助手に就任しないかとの要請を受けた際に、自分自身の未熟で不十分な対応から、結局、助手のポストを無駄にして、岡山大学付属図書館で池田家文庫の整理をする羽目に陥りました。しかし、池田家文庫の整理を担当したおかげで、今度は、私は同文庫で発見した中世和歌の新資料を学会誌に投稿する機会を得たうえに、その論文が運よく採択されたことよってまた、私の専門領域は中古の物語から中世の和歌へとかわる転機ともなつて、定着したわけです。さらに、新資料を発見、紹介したその論文が契機となつて、私は第一線で活躍中の島津忠夫氏などの研究者たちとともに、新資料に関係する一連の歌書を三冊刊行する好運にも恵まれて、私は中世和歌研究者として学界にデビューすることができたのです。

池田家文庫の整理に従事した後、すぐには研究者になれなかつた私は、津山高校の教員になることになりましたが、この津山高校という大学進学校における教員体験はまた、初めて勤務した花園大学という薄給の大学で研究生生活を送るに際して、生活面

我が人生に悔いなし

での金銭的補充をすべく勤めた駿台予備学校で、たいへん役立つという結果をもたらしてくれました。そのうえ、この駿台で得たアルバイト報酬は、二人の娘たちにピアノを徹底的に習わせる契機にもなったおかげで、いま、長女はプロのピアニストとして活躍しています。と同時に、津山高校における教員生活は、同僚たちとの心あたたまる接触を通じて、人生上の種々様々な教訓を得る機会にもなって、これが大学院を修了してすぐに大学の研究者になっていたら、とうてい得ることができなかったであろう人生経験をもさせてくれました。要するに、挫折が逆に、新たな人生の局面を開拓する契機になったというわけですね。

そうして、現在の京都光華女子大学に移籍してからの我が人生は、平凡な歩みで、あえて特筆するような事象はありませんが、学長に選ばれたからには、私自身のアイデンティティーを発揮して、本学をこれまで以上のすばらしい知の殿堂にしなければ、私に与えられた職能を充分に果たしたとはいえませんね。そのためには、本学にかかわる人びとが各自、そこに身を置いたことで、心の底から喜びや充足感を実感したり、職能が充分に発揮されて、それが各人には生き甲斐に、本学には数多くの優秀な学生

を集め、知性を磨く教育現場となつて、本学が個性豊かで、充実した内実をもつ、魅力あふれる高等教育機関に一日もはやく生まれかわることだと、いま私は考えています。学生みなさん、このような私の願望を即刻実現するために、どうぞ積極的なご支援、ご協力をお願いいたします。

以上で、逆縁の人生とも規定し得る「我が人生に悔いなし」と題した、私の拙ない学長講話を終わりたいと思います。長時間にわたるご清聴ありがとうございました。

—二〇〇三年四月二日—